エッセイ

いのちとこころ——物語と否定性

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）
Toshio KAWAI

昨秋に島根大学で開催された箱庭療法学会の「物語と鎮魂」と題する大会シンポジウムで、東北学に長くかかわり、東日本大震災後の支援活動に尽力してきた赤坂憲雄氏は、次のような話を紹介した。

友だちのジャーナリストが震災後に車で道路を走っていて、人をはねたような衝撃を感じた。ところが車を降りて確かめてみても、どこにも人影は見当たらない。それでも気持ちが悪いので警察に届けに行くと、「またあの場所ですか」ということであった。つまり人をはねたように思っても、人影が見当たらないという届け出が、その場所から何件も届いているのだそうだ。友人は、震災で亡くなってさまよっている人をはねたのであろうか。

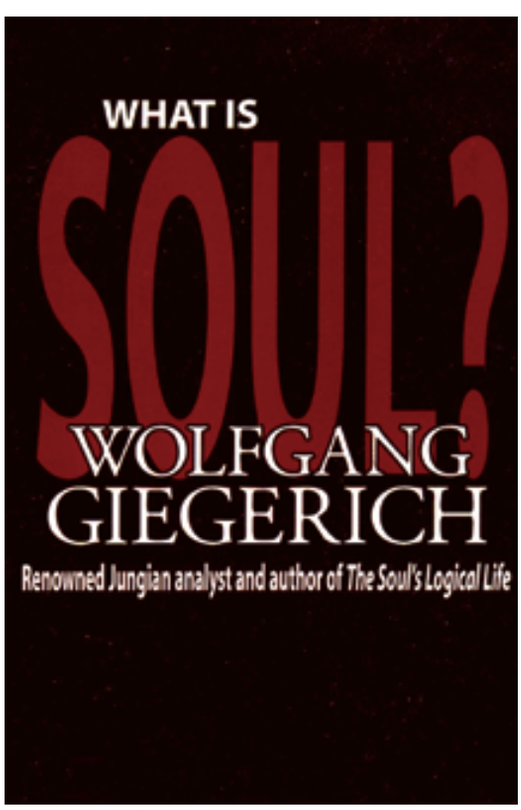
この逸話は、いのちとこころについて示唆するところが多い。まず、見つからなかった人影のように、いのちや魂は実体として捉えることができない。ユング心理学のラディカルな理論家であるヴォルフガング・ギーゲリッヒ（Wolfgang Giegerich）は、昨年出版された*What is soul?*の中で、魂を否定の否定として記述している。つまり死者の魂という表象があるように、いのちの否定としての死体を、さらに否定したときに魂という考えが生まれるというのである。

第2に、いのちや魂について、日常から考えるのはむずかしいことが示されているのではなかろうか。いのちの尊さを説いたりして、平和なときにいのちについて論じても、空理空論になりがちである。心理療法に基づく臨床心理学は、人のこころについて、危機にあるときなど極端な状態から考えていく学問であるけれども、その方法論には一理あって、いのちや魂は、愛する人が亡くなったり、今回のように震災が起こったりなど、極限の状況ではじめて問題にすることができるのではなかろうか。

さらに第3に、冒頭に紹介したように、極限状態でこころはいのちについての「物語」を生む。『ユング自伝』において、「死後の生命」という章が設けられているけれども、そこでユングは、理論的に論じようとはしない。そこではmytho-legein, Geschichte erzählenつまり物語を語るしかできないというのである。ユングは、人が亡くなったときなどの自分が経験した不思議な逸話をいくつも物語っていく。

その中の1つに、母親が亡くなったときにユングが経験したことが挙げられている。知らせを聞いて、帰省する車中のユングはたまらなく悲しかったけれども、同時に楽しげな音楽が聞こえてきて、多くの人々がパーティーをしているかのようであったという。そしてこの体験からユングは、死というのは終わりではなくて、それは多くの死者たちと一緒になる、祝福すべき出来事で、魂としての存在は続いていくのだと結論づける。まさに津波で亡くなった人々の魂が、さまよっているようなものなのである。

もっともこのような体験が、魂の存在について何の証明にもならないことには注意を要する。先述の本でギーゲリッヒは、母親が亡くなったときのユングの体験が、決してナイーブで自然なものでないことを指摘する。つまりユングは、18世紀までは、ヨーロッパでも墓場で楽しいパーティーを持つ習慣があったことを知っていたはずで、その知識を元にヴィジョンの体験を持っていたのではないかと指摘する。先の震災後の幽霊の物語においても、無念に亡くなった人の魂が成仏せずに彷徨（さまよ）うというわれわれの持っている考えの影響を考慮する必要がある。このように、いのちや魂については、常に物語を作っていくことと、それを冷静に見抜いていくことが必要なのであろう。



ヴォルフガング・ギーゲリッヒの*What is soul*？

エッセイ

付喪神（つくもがみ）——他者に思いを寄せる心

長岡千賀（追手門学院大学経営学部准教授）
Chika NAGAOKA

右下の図は京都大学附属図書館所蔵の貴重書の１つで『付喪神（つくもがみ）』というお伽草子に出てくる絵の一部である。道具に人のような顔や手足がついていて、その表情はどこかユーモラスに見える。見ていると、道具たちは何を話し合っているのだろうかとわくわくする。この絵は京都大学オリジナルグッズのクリアホルダーにも使われているほどだ。

ところが実際は決して穏やかなものではない。これは、捨てられた古道具たちが人間への復讐を企てている場面の絵なのである。『付喪神』のあらすじはこうである。

『陰陽雑記』という書物によれば、作られてから百年経った道具には魂が宿り、人の心を惑わすと申します。これが付喪神です。毎年新年になると、古い道具類を路地に捨てる煤払い（すすはらい）という行事がありますが、これは付喪神の災難に遭わないようにと行われるものなのです。

さて、康保の頃でしたでしょうか、例のように煤払いといって、洛中洛外の家々から、古道具が捨てられました。その古道具たちが一所に集まって話し合いをしています。「われわれは長年家々の家具となって、一生懸命ご奉公してきたというのに、恩賞がないどころか、道ばたに捨てられて牛や馬に蹴られなくてはならないとは、何と恨めしいことではないか。こうなったら妖怪になって仕返しをしてやろう。」何だか物騒な相談です。古道具たちはかなり興奮している様子。（以下省略）

（「挿絵とあらすじで楽しむお伽草子　第５話　付喪神」 http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/otogi/tsukumo/tsukumo.html）

このあと古道具たちはさまざまな姿の妖怪になり、京都の北郊の船岡山の後ろに住み、都に出ては悪さをして人々を苦しめる。ここまで読むと、役目を終えた道具たちに感謝を示すべきだ、あるいは、ものを大事にせよ、といった教訓のように見える。しかしこの話はそれだけではない。ここで注目したいのは、小道具が、まるで人と同じように心を持つ存在として描かれているところである。奉公心や恨みという高度な感情を持つ存在として、作者は古道具を描き、読み手も古道具たちに共感しながら読み進む。

この話にはこの他にも、妖怪に変化した古道具たちが優雅に和歌を嗜んだり、自分たちを変化させてくれた神を祭って——祭らなければ心のない木や石と同じではないかと言いながら——朝夕神事をおこなったりする場面さえある。さらには、古道具たちは御法童子の追討を受けたのちは改心して道心し、山奥に住む数珠の上人を訪ねる。この数珠は、妖怪に変化しようとしていた古道具たちを制止したがひどく打たれ、それをきっかけに出家して僧となっていた。古道具たちは「以前ひどい目に合わせてしまったが、心から懺悔すれば慈悲の心で許してくれ教えをいただけるはずだ」と信じてこのような行動をとるのである。

古道具に命や心を見出すことは、長い間健在であり続けたモノに対する日本人の畏怖や畏敬の念の表れと言える。しかしなぜ、古いものに畏怖、畏敬の念を持つのか。

そこには、私たちの心の働き、すなわち、モノを通して、今はここにいない他者に思いを寄せる働きが関係していると思われる。たとえば、古い建築物や道具に接したとき、私たちは、それを今までていねいに使い続けてきた使い手や、それが長持ちするように工夫して作った作り手のことを、自然と感じ取っているだろう。形見の品を大事にしようと思ったり、ある贈り物に「心がこもっている」と感じたりするのも、これと同様の心の働きによると言える。

今はここにいない昔の人を大切に思うからこそ、その人々の生活に密に関わってきたモノにも敬意を持つと考えられよう。そうすると、お伽草子『付喪神』は、他者を大切に思う心にあふれたお話とみることができるかもしれない。

人間への復讐を企てる古道具たち（京都大学附属図書館所蔵貴重書『付喪神』より）